秋田県立博物館研究報告第29号　51～65ページ　2004年３月
Ann. Rep. Akita Pref. Mus., No.29, 51-65, March 2004

展示報告　企画コーナー展「秋田の音楽家」

糸　田　和　樹*　　中　村　美也子*

1　はじめに

秋田の先覚記念室は，秋田県立博物館内の展示室であり，明治～昭和期に活躍した秋田の先覚者152人に関する記録や資料を展示・紹介している．

平成15年度は，昨年度から行われているリニューアル工事のため常設展示の大部分が閉鎖中ということもあり，開館部分の秋田の先覚記念室，菅江真澄資料センター，分館の旧奈良家住宅が中心となって展示・普及活動をおこなっている．近年は小学校のふるさと学習や中学校の総合学習の一環としてのセカンドスクール的利用も多い．

本稿では，秋田の先覚記念室で７月～８月にかけて行われた企画コーナー展「秋田の音楽家」の展示内容と展示に至るまでの経緯，および付帯事業の内容について実施記録として報告する．

なお平成15年度から，従来「企画展」の名称で実施していた展示を「企画コーナー展」に変更した．これは，本館のリニューアルとのかかわりから，秋田の先覚記念室と菅江真澄資料センターの展示規模に見合った名称に統一したためである．したがって，展示の趣旨や，使用するスペースなどは従来と同じである．

2　展示の趣旨

日本においては明治時代以降に西洋音楽を導入して近代音楽史が始まり，滝廉太郎や山田耕筰といった著名な音楽家が現れて音楽界を牽引した．

この時代，秋田県においても「浜辺の歌」の成田為三や「おもちゃのマーチ」の小田島樹人，「山の音楽家」の黒沢隆朝，「羽衣」の小松耕輔ら，数多くの音楽家が輩出されている．彼らは代表作のイメージで語られることが多いが，それぞれが音楽理論や音楽教育の面で音楽史に大きな足跡を残しており，そのことは一般的にはあまり知られていない．2003年は成田為三の生誕110周年ということもあり，これを近代秋田の音楽家たちの業績を振り返る契機として展示を行った．

展示では音楽家たちの中でも代表的と言える上記の４人を取り上げ，彼らの知られざる業績や人となりを紹介した．また，音楽家を身近に感じられるものとして，彼らが作曲した秋田県内の校歌を一覧にしたほか，ＢＧＭとして彼らの代表作を流したり，音楽家に関する著書を特集したコーナーを設置したりして，分かりやすく親しみやすい展示を目指した．

3　今回の展示で紹介した先覚者

・成田為三（なりたためぞう）
明治26年(1893)～昭和20年(1945)
「赤い鳥小鳥」「かなりや」「浜辺の歌」など，数々の童謡の作曲で知られている．一方で，ドイツに留学して本格的な作曲技法を学び，特に和声学と対位法を基本とした輪唱曲や合唱曲の分野で大きな業績を残している．

・小田島樹人（おだしまじゅじん）
明治16年(1885)～昭和34年(1959)
代表作「おもちゃのマーチ」が有名だが，雑誌

*秋田県立博物館

の編集や俳句・書の分野でも活躍している．また，秋田県内の学校で教壇に立ち，音楽教育や普及活動の面で残した業績は大きい．

・黒沢隆朝（くろさわたかとも）
明治28年(1895)～昭和62年(1987)
ドイツ民謡「山の音楽家」の名訳詞家として知られる一方，「楽典」をはじめとする音楽教科書の大家として活躍した．また，台湾をはじめとする東南アジア音楽を研究し，いわゆる「黒沢学説」を提唱している．

・小松耕輔（こまつこうすけ）
明治17年(1884)～昭和41年(1966)
在学中に作曲した日本最初の創作オペラ「羽衣」が有名．このほか，あらゆる分野で西洋音楽の普及と振興に尽くし，音楽界の重鎮として活躍した．また，3人の弟も音楽家として活躍し，「小松音楽兄弟」として知られる．

4　資料調査の経緯

企画コーナー展を行うにあたり，平成14年度から15年度にかけて，以下の機関及び個人宅で資料調査を行った．

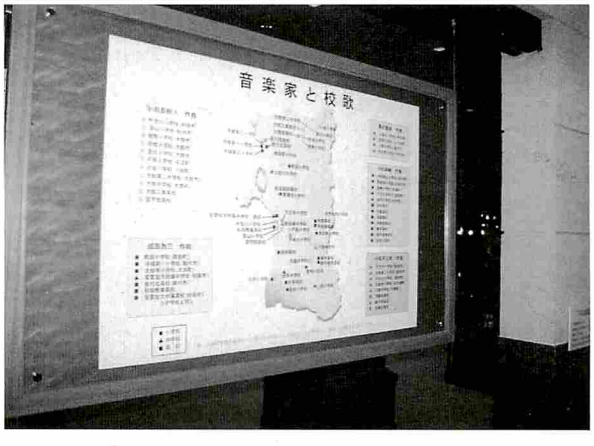
【資料調査】
秋田県立図書館
大曲市立図書館
鹿角市個人宅
国立音楽大学附属図書館
東京都個人宅
東由利町個人宅
森吉町浜辺の歌音楽館

【資料借用】
個人所蔵資料　14点
（自筆楽譜，著作等）
秋田県立図書館　4点
（自筆色紙，著作等）
森吉町浜辺の歌音楽館　8点
（楽譜，懐中時計等）

【校歌調査】
秋田県内のすべての小学校・中学校に対し，市町村教育委員会を通じて現在の校歌の作詞者と作曲者の調査を依頼した．

調査用紙を郵送またはファックスで返送して貰うという手法により短期間で情報収集することができたが，楽譜を収集するところまではできなかった．しかし，以前より楽譜を収集している大曲市立図書館での調査で大部分の校歌の楽譜を閲覧することができた．こちらは著作権の問題もあり，コピーをすることはできなかったが，市町村の合併や学校統合，廃校という時代の流れの中で消えてしまったいくつかの校歌を確認することができた．また，各校から校歌にまつわるエピソードなどを集めることもできた．

これらの資料をもとに，成田為三・小田島樹人・黒沢隆朝・小松耕輔らの県内での校歌作曲状況をまとめ，展示パネルで紹介することができた．なお，調査したすべての市町村の校歌作詞・作曲者については別表にまとめた．



5　展示構成と期間

【展示構成】
展示は4人の秋田出身の音楽家を個々に紹介するかたちで構成した．また，4人とも作曲家として活躍しているため，県内と関わりがある作品として校歌を調査し，その作曲状況を地図にあらわしたものもパネル展示した．

1．黒沢隆朝
自筆楽譜・『楽典』等主な著作・「音階発生論」草稿・「台湾高砂族の音楽」LP

2．成田為三
懐中時計・浜辺の歌初版楽譜・「赤い鳥」復刻版・自筆葉書・著作ほか
3．小田島樹人
シガレットケース・自筆楽譜・短冊ほか
4．小松耕輔と小松音楽兄弟
オペラ「羽衣」楽譜・小松平五郎自筆楽譜・主な著作ほか
5．身近な音楽家～県内の校歌～
6．音楽家に関わる著書（情報資料コーナー内に設置）

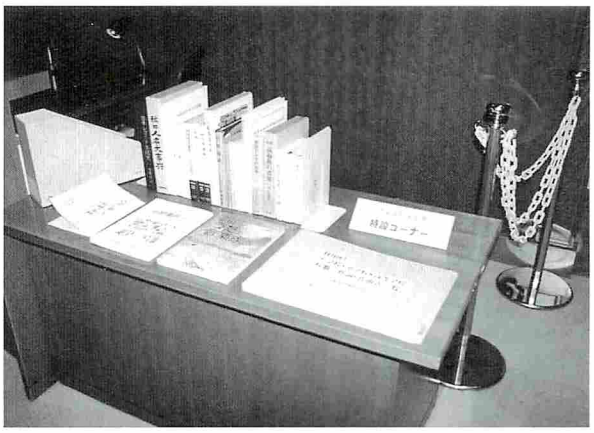
【展示期間】
7月8日(火)～8月31日(日)

6　広報活動・来館者の動向など

ＡＢＳラジオでの広報番組，秋田魁新報をはじめとする県内新聞社への取材依頼など，各種メディアでの広報活動を行った．特に今回は県北地域出身者が3人だったため，県北地域の広報に重点を置いた．また，定期刊行物の博物館ニュースやホームページにも関連記事を掲載した．このほか，音楽がテーマということで，秋田市内を中心に音楽教室などへの広報も実施した．

今回は音楽という親しみやすいテーマだったことから，多くの来館者が足をとめた．特に展示室にＢＧＭを流すという初の試みを行ったところ，非常に好評であり，大人が子供に童謡を歌って聞かせるなどの光景も見られた．

また，著書や資料などを手に取って閲覧できるスペースを情報資料コーナーに特設し，県内小・中学校や高校の校歌調査の結果をリスト化したものも閲覧できるようにしたため，同コーナーの利用者が多く見られた．



秋田県内で教師として活躍した小田島樹人については，教え子であるという方の来館が多数あった．紹介した先覚者の関係者の来館もあり，展示へのご意見をいただくことが出来た．

今回も展示をより深く見ていただくための「展示解説資料」を作成して配布した．業績の解説や年譜が掲載されていることから，来館者には好評であった．

なお，展示期間中（7月8日～8月31日）の本館入館者数は2,756人であった．

7　付帯事業

今回の展示に関連して，次の付帯事業を行った．

講演会「成田為三～人と作品～」
実施日：平成15年8月2日（土）
講　師：浜辺の歌音楽館終身名誉館長
　　後藤惣一郎氏
参加者：42名

場　所：菅江真澄資料センター内
　　スタディルーム

講堂がリニューアル工事で閉鎖中のため，菅江真澄資料センターのスタディルームで実施した．定員（40名）を超える42名の参加があり，成田為三研究の第一人者である後藤氏の身振り手振りを交えた講演に聞き入っていた．

また，講演の最後に成田為三の作曲した管弦楽曲「二つのローマンス」から「湖底の薔薇」「白い帆」を鑑賞し，参加者に深い感動を与えた．
(本報告の最後に，後藤氏の講演内容を掲載)

8　おわりに

本展示では，成田為三・小田島樹人・黒沢隆朝・小松耕輔の４人を取り上げた．企画コーナー展のタイトルは「秋田の音楽家」としたが，音楽家よりも「作曲家」とした方がふさわしかったのではないかと反省される．また，4人とも肖像写真をパネルにしたが，肖像写真の年齢がふさわしいものかどうかという点で検討が必要であった．

今回，初めての試みとして展示室にＢＧＭを流した．従来は著作権法により実施できなかったものだが，ＪＡＳＲＡＣの指導により「入館料を徴収しない教育機関における，あくまでＢＧＭとしての使用」という条件で使用することができ，大変好評を得ることができた．今後の展示のあり方にも大いに参考になると思う．

昨年同様，展示や講演会の広報活動は博物館独自で行ったものだけではなく，先覚者の地元からの協力をいただき，特に森吉町の浜辺の歌音楽館や東由利町教育委員会とは様々な形で連携しながら事業を進めることができた．

また，展示のための調査を通じて自筆楽譜などの新資料を確認・収集することができ，大きな成果となった．

最後に，この場をお借りしてお世話になった方々や各機関に御礼を申し上げたい．

秋田県内　小・中・高等学校の校歌一覧（平成15年７月現在）

市町村	学校名	作曲	作詞	制定年
鹿角市	花輪小学校	高屋新次郎	赤坂文弥	1929
	花輪北小学校	佐藤長太郎	竹内瑛二郎	1968
	平元小学校	海鋒義美	鎌田宏	1957
	十和田小学校	石井歓	竹内瑛二郎	1976
	末広小学校	米沢潤次郎	米沢岩吉	1937
	大湯小学校	下総皖一	石森延男	1952
	中滝小学校	田中正司	石田大三	1965
	草木小学校	柴田源太郎	竹内瑛二郎	1962
	尾去沢小学校	山田耕筰	北原白秋	1934
	八幡平小学校	大山会三郎	竹内瑛二郎	1972
	花輪第一中学校	海鋒義美	竹内瑛二郎	1956
	花輪第二中学校	工藤寿夫	工藤寿夫	／
	十和田中学校	佐藤長太郎	竹内瑛二郎	1970
	尾去沢中学校	高田瑞穂	池内友次郎	1950
	八幡平中学校	小山章三	田中末広	1954
小坂町	小坂小学校	小田島樹人	小田島樹人	1954
	七滝小学校	柴田源太郎	竹内瑛二郎	1961
	十和田小学校	柴田源太郎	東海林忠廣	1961
	小坂中学校	信時潔	竹内瑛二郎	1951
	十和田中学校	柴田源太郎	東海林忠廣	1961
大館市	桂城小学校	小田島樹人	松本延子	1951
	城南小学校	小田島樹人	竹内栄治郎	1915
	城西小学校	佐藤長太郎	竹内瑛二郎	1962
	有浦小学校	小野崎晋三	村木清一郎	1950
	釈迦内小学校	不明:三浦栄一編曲	日景忠太	／
	長木小学校	達子勝蔵	達子勝蔵	1966
	雪沢小学校	小田島樹人（補修:河田郷典）	村木清一郎	1953
	川口小学校	関太郎	高橋茂吉	1926
	上川沿小学校	露木次男	武田武雄	1956
	成章小学校	橋本邦夫	達子勝蔵	1954
	花岡小学校	土屋平三郎	能登太三郎	／
	矢立小学校	後藤惣一郎	若狭ケイ	1957
	大館南小学校	後藤惣一郎	武田武雄	1976
	大館第一中学校	武田昭三	村木清一郎	1951
	大館第二中学校	小田島樹人	貝森隆一	1950
	下川沿中学校	小野崎晋三	村木清一郎	1929
	大館南中学校	大山会三郎	竹内瑛二郎	1966
	成章中学校	信時潔	竹内瑛二郎	1929
	花岡中学校	末武義雄	竹内栄治郎	1950
	矢立中学校	岡本敏明	竹内栄治郎	1957
	東中学校	校歌作曲委員会	宮崎徹	1970
鷹巣町	鷹巣小学校	大山会三郎	朝日了回	1953
	鷹巣東小学校	後藤惣一郎	九島与治郎	1959
	綴子小学校	達子勝蔵	三沢一郎	1930
	竜森小学校	小野崎晋三	石塚綱茂	1940
	中央小学校	岡田志津麿	高村禅雄	1971
	鷹巣南小学校	木内博	松橋修一郎	1972
	鷹巣西小学校	柴田源太郎	石岡順吉	1972
	鷹巣中学校	後藤惣一郎	二階堂善三	1959
	鷹巣南中学校	後藤惣一郎	佐藤鉄章	1963
比内町	扇田小学校	釜范清蔵	豊田八十代	1913
	西館小学校	菅生直己	近藤功	1949
	東館小学校	小野崎晋三	武田武雄	1954
	三岳小学校	露木次男	武田武雄	1962
	大葛小学校	達子幸司	黒沢三郎	／
	比内中学校	木内博	佐藤秀男	1970
森吉町	米内沢小学校	海鋒義美	金伍郎	1955
	浦田小学校	小野崎晋三	山田千之	1955
	前田小学校	成田為三	高橋政和	1928
	森吉中学校	木内博	佐藤秀男	1972
阿仁町	阿仁合小学校	後藤惣一郎	佐藤享平 校歌制定委員会	1978
	大阿仁小学校	佐々木貞治	湊正俊 庄司乙彦 佐々木茂	1995
	阿仁中学校	菅原良吉	大友康二	1991
田代町	早口小学校	大山会三郎	小畑勇二郎	1965
	岩野目小学校	大山会三郎	佐藤健吉	1965
田代町	山田小学校	小野崎晋三	武田武雄	1956
	山瀬小学校	武田昭三	武田武雄	1964
	越山小学校	木内博	佐藤秀男	1969
	田代中学校	大山会三郎	小畑勇二郎	／
合川町	合川東小学校	露木次男	武田武雄	1955
	合川西小学校	達子幸司	竹内瑛二郎	1958
	合川南小学校	露木次男	武田武雄	1955
	合川北小学校	大山会三郎	畠山義郎	1952
	合川中学校	露木次男	畠山義郎	1962
上小阿仁村	小沢田小学校	平井康三郎	武田武雄	1958
	沖田面小学校	佐藤長太郎	小嶋敏夫	1964
	上小阿仁中学校	小野崎晋三	中川至誠	1961
能代市	淳城第一小学校	成田為三	福武周夫	1929
	淳城第二小学校	小松平五郎	葛原しげる	1941
	淳城第三小学校	小松耕輔	豊田八十代	1933
	第四小学校	大山会三郎	五十嵐謙	1956
	第五小学校	大山会三郎	竹内瑛二郎	1955
	向能代小学校	鈴木雄太郎	五十嵐謙	1953
	朴瀬小学校	大山会三郎	朴瀬小職員一同	1946?
	竹生小学校	小野崎晋三	鷲尾義直	1937
	崇徳小学校	大山会三郎	渡部修一郎	1962
	鶴形小学校	宮腰真一郎	小林カネ	1951
	浅内小学校	信時潔	竹内瑛二郎	1955
	常盤小学校	大山会三郎	五十嵐謙	1955
	日影小学校	工藤太刀雄	三輪誠作	1968
	能代第一中学校	信時潔	竹内瑛二郎	1950
	能代第二中学校	小野崎晋三	竹内瑛二郎	1948
	能代東中学校	田村昭夫	秋元利紀夫	1990
	東雲中学校	石井五郎	竹内瑛二郎	1953
	能代南中学校	佐藤敏雄	鎌田宏	1984
	常盤中学校	小野崎晋三	竹内瑛二郎	1957
琴丘町	鹿渡小学校	飾磨咄堂	清水三郎	1904
	鯉川小学校	小野崎晋三	袴田豊	1963
	上岩川小学校	黒沢隆朝	佐藤定吉	1923
	琴丘中学校	下總皖一	竹内榮二郎	1962
二ツ井町	二ツ井小学校	柴田源太郎	堀井与蔵	1962
	富根小学校	黒沢隆朝	山本時宣	1930
	種梅小学校	大山会三郎	山田千之	／
	仁鮒小学校	柴田源太郎	山田千之	1952
	田代小学校	柴田源太郎	五十嵐謙	1957
	切石小学校	柴田源太郎	五十嵐謙	1953
	天神小学校	後藤惣一郎	藤嶋隆三	1952?
	二ツ井中学校	石井歓	竹内瑛二郎	1969
八森町	八森小学校	柴田源太郎	山田千之	1954
	観海小学校	柴田源太郎	竹内瑛二郎	1954
	岩館小学校	神田儀一	神田儀一	1933
	八森中学校	大山会三郎	五十嵐謙	1957
山本町	下岩川小学校	石井五郎	近藤武治	1947?
	森岳小学校	大山会三郎	斉藤喜門	1959
	金岡小学校	大山会三郎	笹村隆一	1961
	山本中学校	大山会三郎	山平富代子	1975
藤里町	米田小学校	伊藤順造	安保小市郎	／
	藤里小学校	石岡邦治	石岡順吉	1974
	藤里中学校	石井歓	尾山篤次郎	／
八竜町	浜口小学校	浜口小学校職員一同	浜口小学校職員一同	1957
	湖北小学校	小野崎晋三	秋田師範学校	1936
	八竜中学校	大山会三郎	竹内瑛二郎	1975
峰浜村	水沢小学校	柴田源太郎	武田圭五	1947
	岩子小学校	柴田源太郎	五十嵐謙	1957
	塙川小学校	柴田源太郎	仙北屋圭司	1957
	峰浜中学校	柴田源太郎	芹田拓也	1981
秋田市	保戸野小学校	岡本敏明	八木橋雄次郎	1953
	明徳小学校	藤井吉次郎	境田四郎	1932
	築山小学校	小田島樹人	竹内瑛二郎	
	旭北小学校	長谷川義男	佐々木高一	／
	中通小学校	田中正司	鈴木正輝	1960
	旭南小学校	小野崎晋三	附金和子	／
	牛島小学校	大山会三郎	竹内瑛二郎	1955
	川尻小学校	藤井吉次郎	滑川道夫	1932

市町村	学校名	作曲	作詞	制定年
秋田市	旭川小学校	小野崎晋三	柳田長十郎	1964
	土崎小学校	石川允	金子洋文	1940
	港北小学校	小野崎晋三	竹内瑛二郎	1953
	土崎南小学校	佐々木竹治	竹内瑛二郎	1961
	高清水小学校	大山会三郎	竹内瑛二郎	1958
	広面小学校	菊地三男	佐々木高一	1934
	日新小学校	深井史郎	中川正男	／
	太平小学校	小野崎晋三	鎌田巳千雄	1954
	山谷小学校	小熊正直	佐々木英二郎	1952
	外旭川小学校	小田島樹人	竹内瑛二郎	1952
	飯島小学校	佐藤長太郎	竹内瑛二郎	1960
	下新城小学校	菊地三男	安田友吉	／
	上新城小学校	菊地三男	鎌田宏	／
	浜田小学校	谷信悦	中川正男	1959
	豊岩小学校	大島郁太郎	中川正男	1954
	仁井田小学校	大山会三郎	竹内瑛二郎	／
	四ツ小屋小学校	信時潔	竹内瑛二郎	1955
	上北手小学校	佐藤長太郎	竹内瑛二郎	1960
	下北手小学校	小松平五郎	大塚定彬	／
	下浜小学校	石井五郎	竹内瑛二郎	1958
	八田小学校	大山会三郎	竹内瑛二郎	1964
	金足東小学校	小野崎晋三	奈良環之助	1954
	金足西小学校	藤井吉次郎	佐々木三郎	1932
	勝平小学校	大山会三郎	竹内瑛二郎	1971
	八橋小学校	佐藤敏雄	竹内瑛二郎	1974
	東小学校	佐藤敏雄	竹内瑛二郎	1977
	泉小学校	佐藤敏雄	竹内瑛二郎	1980
	大住小学校	藤原義久	竹内瑛二郎	1981
	桜小学校	大守崇男	菊地金夫	1984
	飯島南小学校	菅原良吉	大友康二	1986
	寺内小学校	三浦修二	大友康二	1990
	御所野小学校	渡部謙	川上八郎	1991
	秋大附属小学校	下総皖一	石森延男	1954
	秋田東中学校	黒沢隆朝	佐々木高一	1959
	秋田南中学校	大川八朗	江口榛一	1957
	山王中学校	井上武士	山田千之	1956
	土崎中学校	工藤雄一	工藤共子	1958
	将軍野中学校	三界実義	阿部正路	1982
	秋田西中学校	石桁真礼生	中川正男	1964
	太平中学校	大山会三郎	竹内瑛二郎	1961
	外旭川中学校	小野崎晋三	竹内瑛二郎	1962
	秋田北中学校	古関裕而	西条八十	1964
	上新城中学校	菊地三男	鎌田宏	1958
	豊岩中学校	仙葉隆雄	中川正男	1951
	城南中学校	大山会三郎	竹内瑛二郎	1966
	下北手中学校	佐藤長太郎	本郷隆	1958
	下浜中学校	宅孝二 佐藤長太郎	竹内瑛二郎	1957
	城東中学校	石井歓	栗原一登	1980
	泉中学校	小野崎孝輔	大友康二	1981
	御野場中学校	高田三郎	吉野弘	1985
	勝平中学校	高橋馨	吉田朗	1987
	飯島中学校	笹川清一	加藤裕	1992
	桜中学校	小野崎孝輔	加藤豪之助	1999
	御所野学院中学校	三枝成章	島田雅彦	2000
	秋田大学附属中学校	信時潔	竹内瑛二郎	1957
	聖霊短大付属中学校	成田為三	三条西公正	
男鹿市	船川第一小学校	小野崎晋三	竹内瑛二郎	1954
	船川南小学校	大山会三郎	竹内瑛二郎	1960
	椿小学校	佐藤長太郎	竹内瑛二郎	1964
	船川第二小学校	渡辺三郎	小島良宏	／
	脇本第一小学校	佐々木竹治	天野源一	1955
	船越小学校	大山会三郎	竹内瑛二郎	1964
	五里合小学校	貝塚昌治郎	小玉久昌	／
	脇本第二小学校	大山会三郎	竹内瑛二郎	1955
	北陽小学校	佐藤眞	東山重雄	2001
	男鹿中小学校	石川正雄	石川正雄	／
	男鹿南中学校	小野崎孝輔	中村素映子	1992
	五里合中学校	石垣明	三浦喜栄三	1948

市町村	学校名	作曲	作詞	制定年
男鹿市	男鹿北中学校	小野崎孝輔	加藤美香子	1989
	男鹿東中学校	佐藤長太郎	澤木隆子	／
五城目町	五城目小学校	渡辺正	加藤裕	1954
	馬場目小学校	小松耕輔	加藤裕	1953
	杉沢小学校	佐々木章	舘岡恒太郎	1963
	内川小学校	富永三郎	山田千之	1955
	大川小学校	佐藤敏雄	加藤裕	1976
	五城目第一中学校	大山会三郎	竹内瑛二郎	1952
昭和町	大久保小学校	小野崎晋三	半田雄三	1950?
	豊川小学校	小林禎吉	扇田繁治	1956
	羽城中学校	信時潔	黒沢三郎	1952
八郎潟町	八郎潟小学校	佐藤敏雄	竹内瑛二郎	1976
	八郎潟中学校	菊地三男	畠山秀治	1964
飯田川町	飯田川小学校	小野崎晋三	竹内瑛二郎	1950
天王町	天王小学校	小野崎晋三	竹内瑛二郎	1964
	出戸小学校	大越孝太郎	福田克郎	1958
	東湖小学校	井川久一	天野千代之助	1954
	追分小学校	大越孝太郎	小野金治	／
	天王中学校	小野崎晋三	竹内瑛二郎	1951
	天王南中学校	岡本仁	佐藤庸子	1992
若美町	払戸小学校	海鋒義美	工藤武雄	1957
	鵜木小学校	谷信一	柴田金雄	1953
	野石小学校	小野崎晋三	清水まさる	1964
	払戸中学校	谷信一	柴田金雄	1947?
	潟西中学校	小林禎吉	山田千之	1956
井川町	井川小学校	菊地三男	鎌田宏	1973
	井川中学校	石井五郎	加藤裕	1959
大潟村	大潟小学校	石井歓	毛利忠義	1970
	大潟中学校	石井歓	児玉三郎	1971
河辺町	岩見三内小学校	佐藤敏雄	佐藤はじめ	1986
	赤平小学校	小野崎晋三	竹内瑛二郎	1956
	戸島小学校	小田島樹人	中川正男	1954
	河辺小学校	木内博	大友康二	1973
	岩見三内中学校	山上良治	佐藤一	1957
	河辺中学校	高屋新次郎	河辺中学校	1961
雄和町	川添小学校	小野崎晋三	中川正男	1954
	種平小学校	佐藤長太郎	竹内瑛二郎	1959
	戸米川小学校	小松平五郎	竹内瑛二郎	1952
	大正寺小学校	藤原辰五郎	松戸久治	1905
	雄和中学校	佐藤長太郎	竹内瑛二郎	1967
	大正寺中学校	小野崎晋三	竹内瑛二郎	1957
本荘市	新山小学校	松本民之助	吉村比呂詩	1967
	鶴舞小学校	岡本敏明	中山政五郎	／
	子吉小学校	田口洋	光山千亮	／
	小友小学校	小松善之助	須藤遠吉	1971
	石沢小学校	小野崎晋三	尾留川慶治郎	1951
	北内越小学校	大山会三郎	竹内瑛二郎	1964
	松ヶ崎小学校	菅原恒雄	菅原恒雄	1954
	尾崎小学校	小野崎孝輔	大友康二	1991
	本荘北中学校	信時潔	土岐善麿	1949
	本荘南中学校	松本民之助	藪田義雄	1962
	石沢中学校	小野崎晋三	三浦馨	1949
仁賀保町	平沢小学校	小松耕輔	戸蒔良吉	1967
	院内小学校	三浦栄治郎	黒沢三郎	／
	小出小学校	小野崎晋三	山田礼智	1953
	釜ヶ台小学校	三浦栄治郎	佐々木八重治	1964
	仁賀保中学校	露木次男	小松千枝	1963
	釜ヶ台中学校	三浦栄治郎	佐々木八重治	1964
金浦町	金浦小学校	岡本敏明	竹内瑛二郎	1957
	金浦中学校	石井五郎	黒沢三郎	／
象潟町	象潟小学校	尾留川慶三	菊地一男	／
	上浜小学校	西崎嘉太郎	黒沢三郎	1954
	上郷小学校	露木次男	土門退蔵	／
	象潟中学校	石井五郎	沢木隆子	1961
矢島町	矢島小学校	斎藤佳三	斎藤佳三	1953
	矢島中学校	斎藤佳三	斎藤佳三	1953
岩城町	亀田小学校	岡本敏明	今川洋子	1955
	道川小学校	大山会三郎	竹内瑛二郎	1959
	岩城中学校	遠藤実	今野憲朗・大友康二補作	1982

市町村	学校名	作曲	作詞	制定年
由利町	前郷小学校	下総皖一	石森延男	1960
	西滝沢小学校	佐藤吉五郎	三浦梅治郎	1934
	鮎川小学校	山田善一郎	高橋千代三郎	1947
	由利中学校	小松耕輔	加藤貞子	1961
大内町	岩谷小学校	小野崎晋三	遠藤与市郎	1930
	下川大内小学校	豊島重孝	鈴木文雄	1980
	上川大内小学校	小野崎晋三	佐々木正美	1949
	大内中学校	豊島重孝	竹内瑛二郎	1984
	出羽中学校	信時潔	竹内瑛二郎	／
西目町	西目小学校	岡本敏明	西目町教育委員会	1954
	西目中学校	信時潔	西目中学校	1957
鳥海町	直根小学校	小松耕輔	高橋亮吉	1959
	川内小学校	小野崎晋三	竹内英二郎	1966
	笹子小学校	笹子小作曲委員会	竹内瑛治郎	1964
	鳥海中学校	豊島重孝	豊島重孝	1998
東由利町	八塩小学校	豊島重孝 斎藤正男補修	長谷川憲一 斎藤正男補修	1983
	高瀬小学校	小鳥輝夫	畑山昭一	1984
	東由利中学校	小野崎孝輔	竹内瑛二郎	1970
大曲市	大曲小学校	宅孝二	山田千之	1954
	東大曲小学校	高橋武三	高橋武三	1991
	花館小学校	佐藤長太郎	宮越道晃	1973
	内小友小学校	佐藤長太郎	佐々木胖	1956
	大川西根小学校	高橋武三	高橋武三	1973
	藤木小学校	佐藤長太郎	宮越道晃	1976
	四ツ屋小学校	小野崎晋三	竹内瑛二郎	1954
	角間川小学校	佐藤長太郎	本郷隆	1967
	大曲中学校	佐藤長太郎	本郷隆	1965
	大曲西中学校	佐藤長太郎	本郷隆	1961
	大曲南中学校	佐藤長太郎	本郷隆	1973
神岡町	神宮寺小学校	佐藤長太郎	本郷隆	1960
	北神小学校	作曲委員会	伊藤建治	1962
	平和中学校	信時潔	竹内瑛二郎	1953
西仙北町	刈和野小学校	天野正道	石原一輝	1995
	土川小学校	高橋武三	工藤淳志	1977
	大沢郷小学校	簗瀬均	高橋馨	1986
	双葉小学校	信時潔	竹内瑛二郎	1964
	東中学校	石井歓	中村千榮子	1994
	西中学校	築地謙	工藤淳志	1983
角館町	角館西小学校	佐藤長太郎	川村三千夫	1981
	角館東小学校	佐藤長太郎	小西勇	1981
	中川小学校	戸沢繁雄	柴田正雄	1962
	西長野小学校	佐藤長太郎	遠藤純	1965
	白岩小学校	才田正庸	才田正庸	1961
	角館中学校	諸井三郎	三好達治	1956
六郷町	六郷小学校	宅考二	竹内瑛二郎	1951
	六郷東根小学校	高橋武三	高橋正男	1963
	六郷中学校	小松平五郎	竹内瑛二郎	1952
中仙町	清水小学校	佐藤長太郎	鈴木ヤエ子	1962
	豊川小学校	小野崎晋三	倉田政嗣	1937
	豊岡小学校	堀川俊輔	坂本省一	／
	中仙小学校	小野崎孝輔	八木橋雄次郎	1972
	中仙中学校	平井康三郎	勝承夫	1965
	豊成中学校	小野崎晋三	花津谷修一郎	1953
田沢湖町	生保内小学校	小松平五郎	藤原相之助	／
	田沢小学校	堀川俊助	浦山庄作	1954
	神代小学校	小野崎晋三	弾正洸之介	1964
	生保内中学校	信時潔	本郷隆	1957
	田沢中学校	宅孝二	竹内瑛二郎	1954
	神代中学校	城多又兵衛	竹内瑛二郎	1951
協和町	荒川小学校	佐藤長太郎	竹内瑛二郎	1977
	稲沢小学校	千葉修作	手代木茂守	1974
	峰吉川小学校	大山会三郎	竹内瑛二郎	1958
	船岡小学校	小野崎孝輔	大友康二	1982
	淀川小学校	佐藤長太郎	小坂太郎	1980
	小種小学校	大山会三郎	佐藤敬夫	1974
	協和中学校	大山会三郎	竹内瑛二郎	1971
太田町	太田東小学校	佐藤長太郎	大釜松治	1962
	太田南小学校	成田為三	倉田政嗣	1934

市町村	学校名	作曲	作詞	制定年
太田町	太田北小学校	皆川昇	才田正庸	1963
	太田中学校	宅孝二	本郷隆	1957
南外村	南楢岡小学校	佐藤長太郎	伊藤一男	1963
	南外西小学校	佐藤長太郎	竹内瑛二郎	1967
	南外中学校	岡千戈	佐藤克司(原作)	1978
仙北町	南小学校	佐藤長太郎	本郷隆	1968
	北小学校	加賀谷哲郎	原正雄	1960
	仙北中学校	佐藤長太郎	竹内瑛二郎	1963
西木村	西明寺小学校	平岡均之	大蔵徳英	1930?
	檜木内小学校	才田正庸	才田正庸	1934
	上檜木内小学校	／	／	1971
	西明寺中学校	戸沢繁雄	水谷稔	1950
	檜木内中学校	才田正庸	杉村祥雲	1952
千畑町	千屋小学校	石山喜一	高階順治	1932
	千畑南小学校	校歌制定委員会	校歌選定委員会	1973
	千畑中学校	佐藤長太郎	竹内瑛二郎	1968
仙南村	仙南東小学校	小野崎晋三	竹内瑛二郎	1956
	仙南西小学校	佐藤長太郎	竹内瑛二郎	1958
	金沢小学校	小野崎晋三	三浦左嘉喜	1962
	仙南中学校	佐藤長太郎	竹内瑛二郎	1961
横手市	横手南小学校	堀内敬三	堀内敬三	1955
	朝倉小学校	小野崎孝輔	竹内瑛二郎	1983
	旭小学校	佐藤長太郎	竹内瑛二郎	1954
	栄小学校	小野崎晋三	笹山登生	1954
	境町小学校	山本正夫	沼田平治(旧) 佐々木重雄(現)	1936
	黒川小学校	佐藤長太郎	平川英一	1964
	金沢小学校	柿崎かくじ	小川正太郎	1959
	鳳中学校	柿崎珏司	小徳博 石塚昌男	1959
	横手西中学校	佐藤長太郎	奥山正一	1946
	金沢中学校	信時潔	竹内瑛二郎	1949
	横手南中学校	小野崎孝輔	八木橋雄次郎	1972
増田町	増田小学校	池辺晋一郎	村田さち子	2002
	増田中学校	深井喜一	真崎日魯雄	1961
平鹿町	浅舞小学校	／	細谷則理	／
	蛭野小学校	長谷川峻彦	佐々木順	1953
	吉田小学校	小野崎晋三	長澤不二男	1952
	醍醐小学校	柿崎珏司	柿崎紅果	1954
	平鹿中学校	菅原良吉	柿崎信彦	1997
雄物川町	雄物川北小学校	小野寺建子	小西保明	2000
	南小学校	大塚捷平	小野寺幸雄	1999
	福地小学校	山本正夫	沼田平治	1934
	大沢小学校	高野紘	藤原英一	1965
	雄物川中学校	小野崎晋三	佐々木順	1963
大森町	大森小学校	小野崎考輔	紅川草一	1974
	白山小学校	佐々木巌	佐々木温	1968
	保呂羽小学校	坂本昌	小松連蔵	1989
	川西小学校	八木伝	八木橋雄次郎	1961
	大森中学校	佐藤長太郎	佐々木正四郎	1970
十文字町	十文字第一小学校	佐藤長太郎	竹内瑛二郎	1959
	十文字第二小学校	小野崎晋三	酒井田蒼秋	1952
	植田小学校	柿崎かくじ	神馬一	1957
	睦合小学校	山中富之助	信太運治	1950
	十文字中学校	高橋貞夫	高橋清	1954
	十文字西中学校	高橋貞夫	佐藤信健	1966
山内村	山内小学校	大山篤	斎藤昂一	1992
	山内中学校	山崎常四郎	渡部八郎	1951
大雄村	田根森小学校	伊藤翁介	八木橋雄次郎	／
	阿気小学校	柿崎珏司	弾正光之助	1964
	大雄中学校	小田島樹人	山田千之	1953
湯沢市	湯沢東小学校	大野桂二	神部龍平	1972
	三関小学校	黒沢隆朝	井上源吾	1935
	湯沢西小学校	山本正夫 佐藤長太郎(編曲)	橘徳松 与謝野晶子(校訂)	1924
	山田小学校	柿崎かくじ	高橋定治	／
	湯沢北小学校	谷慶郎	木村年宏	1978
	岩崎小学校	柴田源太郎	岩井川安次郎	1951
	須川小学校	島森道邦	田尻囿介	1966

市町村	学校名	作曲	作詞	制定年
湯沢市	高松小学校	佐々木継男	小嶋豊晴 佐々木継男	1963
	坊ヶ沢小学校	伊藤欣吉	岩井川安次郎	1964
	湯沢北中学校	須田昌平	黒沢三郎	1964
	山田中学校	加藤直	滑川道夫	1952
	須川中学校	佐藤京二	高橋一郎	1961
	湯沢南中学校	須田昌平	柾修爾	1971
稲川町	稲庭小学校	小野崎晋三	稲庭小学校	／
	三梨小学校	佐藤長太郎	紅川草一	1962
	川連小学校	小野崎晋三	酒井義一	1956
	駒形小学校	清野健	酒井田京三	1965
	稲川中学校	石井歓	中田浩一郎	1976
雄勝町	横堀小学校	佐藤長太郎	田尻圀介	1955
	院内小学校	上山英明	宮越道晃	1974
	秋ノ宮小学校	柿崎珏司	村上康二郎	1965
	中山小学校	大野桂二	押切順三	1965
	小野小学校	大野桂二	高橋順慥	1947
	雄勝中学校	大野桂二	押切順三	1973
羽後町	西馬音内小学校	須田昌平	大江良太郎	1958
	明通小学校	桑原礒吉	田口恭雄	1961
	三輪小学校	菊地三男	小坂太郎	1965
	新成小学校	佐藤長太郎	木沢長太郎	1964
	明治小学校	菊地潤朗	明治小校歌委員会	1964
	元西小学校	山下毅雄	小坂太郎	1971
	飯沢小学校	高端真一郎	小坂太郎	1974
	田代小学校	小野崎晋三	木沢長太郎	1964
	上到米小学校	佐藤信夫	鈴木武治	1963
	軽井沢小学校	伊藤欣吉	木沢長太郎	1961
	仙道小学校	原伸二	木沢長太郎	／
	三輪中学校	須田昌平	山田千之	1955
	高瀬中学校	一柳慧	大岡信	1994
	羽後中学校	芥川也寸志	井上靖	1975
東成瀬村	東成瀬小学校	小野崎孝輔	大友康二	2000
	東成瀬中学校	菊地三男	鎌田宏	1957
皆瀬村	皆瀬小学校	佐藤敏直	佐藤俊吉	1969
	小安小学校	大野桂二	大友康二	1970
	皆瀬中学校	佐藤敏直	佐藤俊吉	1978

学校名	作詞	作曲
花輪高校	村木清一郎	小野崎晋三
十和田高校	白鳥省吾	下総皖一
小坂高校	小坂高校職員生徒	柴田源太郎
大館鳳鳴高校	土井晩翠	東儀鉄笛
大館桂高校	鎌田基吉	小松平五郎
大館高校	佐藤博信	石井歓
大館工業高校	伊藤孝一	小田島樹人
大館商業高校	黒崎勲	中川幸司
鷹巣農林高校	高野辰之	岡野貞一
鷹巣高校	小田島由男	浅野洋一
米内沢高校	竹内瑛二郎	信時潔
公立合川高校	江口榛一	長谷川良夫
二ツ井高校	渡部万次郎	大山会三郎
能代高校	藤村作	岡野貞一
能代北高校	鎌田春雄	成田為三
能代工業高校	相馬御風	山田耕筰
能代西高校	竹内瑛二郎	小松平五郎
市立能代商業高校	芳賀忠正	大山会三郎
五城目高校	加藤裕	小松平五郎
海洋技術高校	山田千之	石川五郎
男鹿高校	一関吉美	大山会三郎
男鹿工業高校	沢木隆子	四反田素幸
金足農業高校	近藤忠義	岡野貞一
秋田西高校	分銅惇作	石井歓
秋田高校	土井晩翠	梁田貞
秋田北高校	尾上八郎	岡野貞一
秋田南高校	境田四郎	小林清人
秋田中央高校	山田千之	井上武士
新屋高校	阿部正路	三浦晃
秋田工業高校	相馬御風	宮原禎次
市立秋田商業高校	岩谷嘉市	成田為三
市立御所野学院高校	島田雅彦	三枝成彰
本荘高校	藤原正	旧制一高寮歌
本荘高校下郷分校	小松敏勝	菊池三男
由利高校	相馬御風	小松耕輔
由利工業高校	平山忠義	迫新一郎
矢島高校	佐藤成美	小松耕輔
西目高校	安田次貞	露木次男
仁賀保高校	中山健	高野豊昭
西仙北高校	小山田四郎	佐藤長太郎
大曲農業高校	高橋源太郎	近藤時太郎
大曲農業高校太田分校	藤原茂	石井五郎
大曲高校	結城哀草果	信時潔
大曲工業高校	竹内瑛二郎	小野崎晋三
角館高校	島木赤彦 斉藤茂吉(補作)	小松耕輔
角館南高校	川島堰一郎	小松耕輔
六郷高校	又井盛治	小野崎晋三
横手高校	土井晩翠	小松耕輔
横手城南高校	幸田露伴	小松耕輔
横手工業校	鶴田知也	佐藤長太郎
平成高校	太田かほる 大友康二(補作)	後藤洋
雄物川高校	佐々木順	小松耕輔
増田高校	片野忠吉	信時潔
湯沢高校	清水重道	橋本國彦
湯沢北高校	飯塚昌治	土屋平三郎
湯沢商工高校	佐々木順	佐藤長太郎
羽後高校	本郷隆	佐藤長太郎
雄勝高校	押切順三	佐藤長太郎
聖霊女子短大付属高校	三条西公正	成田為三
国学館高校	高橋弥太郎	小田島樹人
秋田和洋女子高校	佐々木幸綱	三善晃
秋田経済法科大学附属高校	弾正洸之介 校歌選定委員	飯田三郎
秋田修英高校	本郷隆	佐藤長太郎
秋田工業高等専門学校	佐々木久春	岡本敏明

講演会「成田為三～人と作品～」講演記録

皆さん，今日はどうもご苦労様です．

実は私，しばらくものを言う機会がなくて，お粗末な話になるかもしれませんが，悪しからずご了承ください．今日ですね，私は，この博物館からお招きいただいて，是非とも皆さんに考え直しをしていただきたいことがあると，そういう課題が頭の中にあります．これは，日本全国に向かって言いたいことなんです．幸い，秋田県のこの一番大事な会場から皆様にお話できるということで，光栄に，そしてありがたく思っております．

成田為三については，今までの「成田為三」という見方が，作曲家としての見方が，あまりにも一枚看板に流されているので，「本当はこうなんですよ」ということを申し上げたいんです．これは日本全国で直していかなければならないことです．そのトップとして皆さんにお話します．

今までのことは，私，魁新報社からこういう本（『浜辺の歌と嗚呼玉杯』）を出しておりますが，これにある程度為三のことをまとめております．しかし，今日は今までのことをただ羅列するのではなく，本当はこうだという最後のとどめを，皆さんにお話したいと思います．

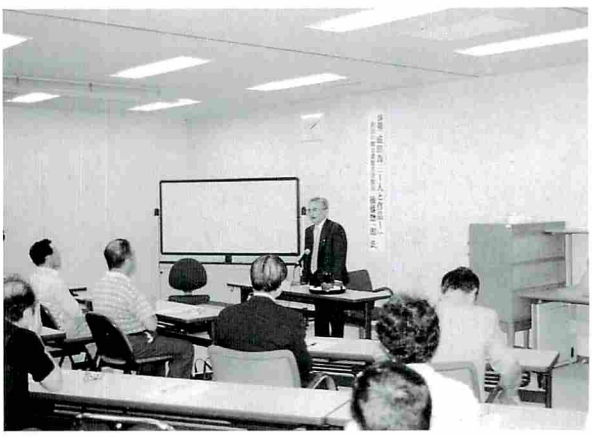
まず，皆さんのお手元にある為三の年譜，実はこれは出来たてなんです．今朝までかかって直してもらったものですから，皆さんのは初版ということになります．これは今，私は著書に取り組んでおりますが，それに入れるために作ったもので，一番新しいものです．

今日お話申し上げたいことは，「浜辺の歌」がどうのこうのではなく，為三の，作曲家としての，そして教育者としての，人間としてのそういう面から新しく見直しをしたいのだと，こういうわけでございます．その前に，順序として，まずありふれたことになりますが，年譜をご覧ください．これは読めば分かることなんですが，為三の人柄ということについてお話します．「為三の人柄はこうだ」と決めつけることは誰にもできませんが，こういう時にこういうことを言った，こういうことをしたという事実から，皆さんがご判断していただければありがたいです．

まず，為三は何よりも一言で言うと，頭のいい子供であったということです．仁鮒小学校の卒業台帳，昔の卒業台帳は成績順で書くんですが，為三はその卒業台帳のトップになっております．昔の義務教育は四年間だったんです．そして，為三の友達によると，学校へ行って先生が算数を教えてくれたが，解き方が分からないとなると帰る途中で為三が解き方を親切に教えてくれたことがありがたかった，と言っているように，為三は人には親切なタイプだったようです．兄の成田憲生に言わせると，末は学者か先生かということで，音楽家なんて考えてもいなかったんです．結果から言うと為三は，兄の期待にまったくはずれたわけです．

そういう頭が良くて親切な子供だったので，秋田県師範学校の卒業の時には，50名中11番の成績で卒業しました．これは私が秋田大学の資料室の台帳で調べたことですが，相当いい方の成績であったと思います．

もう一つ，為三は非常に親孝行でして，親もまた「ためこ，ためこ」と言って為三を可愛がり，学校から帰ると味噌パンなどをあげていたと言います．為三はいつもそれを友達と一緒に食べたということです．母親がすごく為三を可愛がったので，為三がドイツ留学中，毎月２日になると決まってドイツから５円のお金が送られてきたそうです．当時の５円は，今ではいくらくらいでしょうかね．これは，当時の郵便配達の人がびっくりするくらい，いつも同じ日にきていたということです．これがドイツ留学中の話です．とても親思いだったようです．



為三はドイツでどうやってお金を稼いだかというと，結局は「赤い鳥」，これは月に一回作曲をして，東京の鈴木三重吉に送って，その作曲料を親に送るお金と自分の留学費用にあてたんですね．今のように国や県のお金とか補助で留学するという，そういうスタイルではなく，自分の力で道を切り開いていく，そういう人であったようです．

ある人が為三のお母さんに「ためこからいつもお金が来るけど何に使ったのか」と聞くと，そのお金で畳を取り替えたと答えたということです．とても親も喜んでいたようです．親思いだったんですね．

それから，未亡人の文子さんによりますと，「主人は趣味が何もなく，ただ作曲することしかなかったけれど，あえて趣味が何かといえば散歩することだけだった」ということです．買い物に行く時には必ず一緒に行って，ものを持ってくれたり色々手伝ってくれて，大変親切だったということです．また，子供の頃に阿仁川のほとりを歩いた思い出などを，よく文子さんにも語っていたようです．つまり，女房思いで，趣味はないけれど散歩は欠かさなかったと，そういう人だったんですね．

為三は秋田県人に通じることだったんですが，自己宣伝が嫌だったんですね．自分が何かをやれるふり，やったふりが大嫌いだったんです．真面目というか，そういうタイプの人だったそうです．ただし一つ厳しいことがありました．それはお客さんが何時に来るという約束をすると，あと何分なのかと時計をみながら，まだ来ない，まだ来ないとそわそわしていたようです．つまり，時間に対しては相当に厳しかったようです．これは，音楽という時間芸術に関わっていたためかもしれません．

為三の人柄を一括してああだこうだと申し上げることはできませんが，仕事，特に作曲ということになると，すごく厳しく，適当にものをまとめるタイプではなかったようです．国立音楽大学の先生で，秋田県にも何度も指導に来た岡本敏明先生という人がいました．岡本先生が為三の門を叩いた時，岡本先生はすでに作曲コンクールで何度も入選していて前評判も高かったのですが，彼が為三に入門したら，「イロハのイの字」という言葉がありますが，全く最初のことからやらされたそうです．つまり，音楽でいうとバッハやヘンデル以前の，本当に西洋音楽の最初の最初から，分かり切ったようなことから岡本先生に教えたそうです．岡本先生は音楽コンクールにも入選するような人だったのですが，それを馬鹿らしいとは思わず，むしろ為三の誠意と熱意にうたれて感動し，14年間も為三にお世話になったと言っております．つまり，為三は仕事や指導については，でたらめやいい加減なことは許さず，大変厳しかったということです．厳しく音を教えてくれる，そういうタイプの人であったということです．

こうしたことから，皆さんも成田為三ってこういう人柄の人なんだなあ，ということを考えていただければと思います．過去の事例をもとにして申し上げました．

ここまでを為三の人柄ということで，まずひとくくりにさせていただきます．

次に，為三が日本の教育音楽界，学校関係に与えた影響の大きいものは何か，ということですが，これはあまりに無視されているのではないかと思います．今は皆さん輪唱ということはご存じですね．ある節があって，それを何歩かおいて同じ節を追いかけ回していく歌で，これを輪唱と言います．日本の音楽教育界には，それまで輪唱というものはなかったわけです．もちろん，合唱も昭和２年にはありませんでした．輪唱も合唱もない時代，為三は大正時代にドイツに行っていたのですが，「日本に輪唱がないのは嘆かわしいことだ．ドイツの子供はみんな輪唱・合唱を学んでいるのに，日本にないのは残念だ」ということで，雑誌「赤い鳥」に「山の枇杷」という曲を作って，ぜひ日本の国の音楽でも，輪唱ということをドイツ並みに考えてもらいたいということを書いて送っているわけです．今だと皆さんは輪唱というのを当たり前だと思っていますし，教科書にも載っていますが，この時代の日本にはなかったのです．昭和７年の文部省唱歌の中には，輪唱も合唱もないんです．今考えると，今が盛んになったというのか，昔が遅れすぎていたのか，そういう実情だ

っということです．

その志を継いで，為三の一番弟子の岡本敏明先生が，秋田にも三回も来ているんですが，全国の先生方に指導をしています．岡本先生が行った指導は何かと言うと，輪唱の指導です．為三が作った楽譜や，ご自分が作った楽譜を使って指導していました．私も生前の岡本先生にはずいぶんお世話になりましたが，先生はこういうことをおっしゃっていました．「弟子としての僕は，恩師の為三先生の意志を日本中に伝えることが役目だと，つまり輪唱というものを広めなくてはいけないと思っている」と．それで，岡本先生は全国を股にかけて歩いて，そうして輪唱中心の音楽を徹底して指導したのです．これは秋田だけではなく，青森も岩手もですが，全国を回って輪唱の指導を行ったのです．今は輪唱は教科書にも当たり前に載っていますが，その当時は無かったのだということです．日本の音楽教育の基本になる，そういう指導をされた岡本先生は，先生も先生なら弟子も弟子ということで，全くすばらしい仕事をされました．このことを，秋田県の人は，岡本先生が全国を回ったことは知っていても，それが当たり前のことのようにしか思っていないようなんですね．日本の音楽教育史において，為三は，そして弟子の岡本先生は，大きな功績があり，これはとても大事なことなのです．そのことを申し上げたいと思います．

成田為三というと，皆さんはすぐ「浜辺の歌」「かなりや」とくるんですね．確かに，フォード大統領が昭和天皇をアメリカに招いた時に，「君が代」も「さくらさくら」もやらずに，28歳の若いピアニストに「浜辺の歌」を弾かせたということがありました．公式なレセプションでですよ．そういうことをご存じですか?これは毎日新聞に載っていた話です．

ですから，どうしても成田為三と言えば「浜辺の歌」になってしまうんです．確かに，浜辺の歌はすばらしい曲です．実は，あの一曲だけで未亡人の文子さんの生活は支えられていたんです．今のように年金があるわけではないので，為三が亡くなれば収入がないはずなのになぜ食べていけるかというと，実は「カラスが泣かない日があっても浜辺の歌が流れない日はない」というくらいでして，未亡人は3年前に静岡で亡くなられるまで，その為三の名曲の著作権で支えられたわけです．作曲家というのは，著作権協会というのがあって，著作権法という法律で保護されているわけでして，月々の使用料が入ってくるわけです．それが未亡人の生活を支えたということなんです．

ただし，私が申し上げたいことはそのことではないんです．浜辺の歌は確かにすばらしい曲です．世界に轟き海を渡った名曲です．ところが，日本列島のあちこちの浜辺で「為三がここで浜辺の歌を作った」とか，適当な観光ブームにのせて勝手に言っているところもありますが，証拠は何もないんですね．作曲ということを分からないと，そういう適当なことを言ってしまうんでしょうが，新聞に活字で出ると，嘘が本当になってしまうこともあるので怖いんです．

それは置いておいて，浜辺の歌は確かに日本人にとってすばらしい曲ですが，為三にとってはどんなにすばらしい曲であっても，歌ですからね．為三という作曲家は，今まで出た本ではみんな「歌の作曲家」ということになっているんです．あの音楽界の大御所の小松耕輔でさえも「成田為三は歌の作曲家だが，日本的な匂いを含ませた歌を作っている」ということを著書で書いているのです．

あらゆるものの本に，為三は「かなりや」と「浜辺の歌」だ，ということになっているようですが，本当にそうなのかどうかということです．

そのことについて，これからお話します．為三はですね，何のためにドイツに，今のように補助金をもらって行くのではなく，50日も船に乗って，神戸からフランスのマルセイユを通り，第一次大戦後のドイツまで行ったのでしょうか．飛行機がない時代ですから，船なんです．

そこで何を勉強してきたかということです．日本人は，為三はドイツにいって作曲をしてきたとか，作曲の勉強をしてきたとか，非常にあいまいです．「作曲の勉強」って何でしょうか．為三はドイツに行って作曲をしたわけではないのです．作曲をしたのは，「赤い鳥」に載せるために，詩に曲をつけて鈴木三重吉に送っていたものだけで

す．それで作曲料をもらってお母さんに送り，自分のドイツでの生活費にもしていたんです．今思えば，当時の日本の円高というのはものすごいですね．ドイツがそのころ，戦争に負けたばかりだったので，日本のお金の価値はとても高かったようです．

為三がドイツに行ったのは，正しくは作曲の「基礎になる」もの，裁判官でいえば法律を学びに行ったのです．裁判官が法律を分からないでは裁判ができませんね．作曲の世界でも，西洋音楽にはちゃんと法律があるんです．そういう学問があり，それが分からないと，本当の作曲はできないものなんです．現代はみんな作曲の真似事みたいなものをして，作曲だ作曲だと言って，作る方も作る方だし，聞く方も聞く方で，どうも世の中がちょっと変になっていると思うんですが，この日本の世の中を為三が見たら，嘘だらけだと激怒するだろうと思います．

繰り返しますが，為三がドイツに行ったのは，本物の作曲をするための基礎になるものの勉強に行ったのだということです．それは，「和声学」と「対位法」というものです．和声学は和声法とも言います．これは，曲の伴奏を作るための，世界各国で通じるはっきりした学問というのがあるんです．裁判官で言えば法律です．この学問なしで伴奏を付けるというのはとても滑稽なことですが，それが最近は流行ってるみたいですね．

和声学と対位法，これはね，音楽の音を組み立てる2つの法律なんです．和声学というのは，ドミソとかドファラとか，音が鳴るでしょう．これが和声，和音というんです．また，対位法というのは宮本武蔵の二刀流と同じで，こっちの節もあるしあっちの節もある，節が２本も３本も４本もある．節というのはメロディと言いますが，その作り方を対位法というんです．これが分からないと，本当の伴奏を書けないんです．節だけなら皆さんも，「ア～」とうなれば作ることができますね．それも作曲といえば作曲でしょうがね．対位法が分からないと，作曲の真似事でしかないんです．

どうも，そういうのを無視した伴奏が，現代の音楽になっているんですね．だけど，誰もそれをおかしいと思わないんですね．これを聞いた為三は墓の中で怒っておると思いますよ．対位法というのは，節が追いかけていくもので，オーケストラ，管弦楽の曲は対位法で構成されています．この対位法と和声学が分からないと管弦楽曲は書けないんです．ピアノの伴奏というのは，あれは本物がきちんと書けていれば，それがそのままオーケストラの曲にもなるんです．ところが，そうでない伴奏がいっぱいあるんです．今の日本にはあふれているんですが，誰も何も言わないんですねえ．

為三は，対位法と和声学，この２つを身につけるためにドイツに４年もいたんです．ドイツで曲を作っていたわけではないんです．この学問は，日本の大学を出たからといって，身につけられるわけではないんです．

そして，これが分からないとちゃんとした曲は書けないんです．ですから，学校の校歌や町民歌があると，私は伴奏譜を見せてくださいと言うんです．本物であれば，その伴奏はそのままオーケストラにも使えるんです．でも，実際はちょっと「うーん」と唸らざるを得ないものが多いんです．でもそれが今の世の中なのかなあ．そう思って黙ってるんですが．

為三がドイツに行ったのは，この２つの学問を身につけるためだったんですが，もちろん，このほかに管弦楽法とか，楽器編成法とか，指揮法とか，そういうものも勉強しています．これらは字で書けば簡単だし，言葉で説明すれば簡単ですけど，なかなか本物の勉強をすることは難しいんです．これは世界に通じる音楽の学問なんです．

だから，為三がドイツに行ったのは，ただ作曲

しに行ったのではなく，作曲の基礎勉強をするために行ったんですが，そこのところが履き違えられているんです．曲を作るためにドイツに行ったと思われていますが，曲を作るもとになる学問の勉強をしに行ったのです．この辺はかなり誤解されているんです．

今，為三の器楽曲の話をしたわけですが，私が昭和31年に秋田県の音楽担当指導主事になったとき，菊池三男先生という方がいらっしゃって，大変懇意にしていただきました．その先生が，「後藤君，君は秋田県で最初の音楽担当指導主事だから，東京に行って山田耕筰さんに挨拶をしないといけない」と言うので，東京の全国指導主事会議に出席した帰りに行ってきたわけです．世田谷の山田耕筰のご自宅にうかがいましたら，とても良い方なんですね．怖い感じの方かと思っていたら，実に柔らかい人で，とても親切にしてもらい，おまけに玄関まで送っていただきました．そして，山田耕筰は「秋田の人たちは，もっと成田為三君を大切にしなければだめだねえ．対位法の技法にかけては，日本では彼の右に出るものはいないからねえ」とにこやかに笑いながらおっしゃいました．私はそれが頭の中に深くしみこみまして，秋田県初の音楽担当指導主事として，頭にぐっときたんです．これで私は，ああ為三を調べないといけないと，そう思いました．それに，岡本敏明先生からも，成田先生の意志を継ぐのだという話もありました．

こういう二人の先生の話が，私の頭にこびりついて離れなくて，それで52年間も為三という人を調べてくる原点になったというわけなんです．

為三は単なる「歌の作曲家」ではないということを申し上げました．もちろん「浜辺の歌」という看板があって，そのおかげで未亡人は生活できるし，日本はもちろん，アメリカでもフランスでも演奏されている素晴らしい歌であることは間違いありません．為三の良いところは，西洋音楽の一辺倒にはならずに，日本の歌も書いているということです．

どういう歌かというと，「すみれ」とか，「うらうらと」「ほろほろと」など，これは，日本の短歌をもとにして日本的な韻律で作った，しかも対位法の曲なんです．こういう風に，対位法的な作曲を，しかも日本的な色彩の曲をたくさん残しているんです．今では誰もこういう曲はできないんです．こんなすばらしい曲を誰が書けるんですか．ただ，こうした曲は，そのまま埋もれ続けていたこともまた事実です．これも変な話だな，と私は思うんです．

それから，もう一つ，みなさん「♪う～みは荒～海～」という，「砂山」という曲がありますね．中山晋平という大作曲家の曲です．けれども，為三は，あの「砂山」に中山晋平よりも先に曲を作っているんです．ドイツから帰ってきた後の，昭和２年ですね．でも晋平とは全然違った曲で，しかも合唱の曲で作っているんです．ところが，実はその昭和２年には日本に合唱はないんです．合唱がないので，作ってもそのままなんです．私もやっと十何年か前にこの曲を見つけたんです．それで，為三の「砂山」と中山晋平の「砂山」を比べると，晋平のものは確かに「晋平調」なんです．晋平調というのは，何にでも明るい節をつけるんですね．ドンチャドンチャ，という感じですね．これはこれでいいと思いますよ．でも，作曲というのは一つの詞，詞というのは汽車でいうとレールなんです．そのレールがどういうレールなのかを考えずに節をつけるというのは，ちょっとおかしいと思いませんか．悲しみの詞なのに喜びの歌をつけるのは少しおかしくないですかね．作曲家というのは，特に歌曲の場合は詞を読んで，その詞の持っている心情，情感，センスというのを自分で読み取って感じ取って，音のコンポジション，構成を考えるのが仕事なんです．

たとえば，中山晋平は「(明るく) ♪海は荒海～」という曲でしょう．為三は「(暗く) ♪海は荒海～向こうは佐渡よ～」となるんです．これが為三の「砂山」なんです．晋平とは違うでしょう？これは作曲者の感覚で言うと，あまりにも違った表現になってしまっているんです．この為三作曲の「砂山」という曲は，浜辺の歌音楽館の10周年の時に初めて歌われたんです．為三は「歌の作曲家」ではない，とさっきは言ったけれど，日本的な混声合唱などを作っているんです．日本の詞の心情を受けて，そして作曲しているんです．

これを付け加えておきます．

でも，みんな「浜辺の歌，浜辺の歌」と言うので，それが一枚看板になっているんですね．実は浜辺の歌音楽館を作るとき，最初は「成田為三顕彰館」と名前を付けようと思っていたんですが，その時の町長が「やっぱり浜辺の歌の方が全国的に有名だからなあ」というので，「浜辺の歌音楽館」という名前になったわけです．

為三は「浜辺の歌」が歌われると，機嫌が悪くなったそうです．その悪くなるわけを，実は今，著書の中で種明かしをしようと思って整理しているところなんです．清水嘉介という人は，為三の最後の弟子で，為三が疎開先から東京に帰る時にも彼と岡本敏明先生が為三を迎えに来たわけです．その清水先生が「どうしてかなあ，為三先生は浜辺の歌が流れると，さっさと終わればいい，などと言うんですよ．どうして浜辺の歌を歌うと機嫌が悪くなるのかなあ」ということを言うんです．

ただ，それにはわけがあって，為三は本格的なオーケストラの作曲家であるのに，まるで童謡作曲家であるかのように同じ列に並べられることに対する，芸術家としての不満があったのではないかというのが，まずは的はずれではない理由だと思います．清水先生は，為三の家に音楽を習いに行っていると，当時ラジオに浜辺の歌がよくかかっていたんですが，為三は機嫌が悪くなって「早く終われ，早く終われ」と言っていたのだそうです．

ちょっと話が飛んでしまって申し訳ないですが，為三の人間性の話，最初の話に戻らせてもらいますね．ここで展示もしている黒沢隆朝のことです．（写真を見せながら）これは私が，隆朝が亡くなる少し前に，東京の隆朝の自宅で一緒に撮った写真です．展示している隆朝の写真は若いでしょう?でもこれはもうおじいちゃんの写真です．

為三という人は，よく人の面倒を見る人で，そういうことを何とも思わない人だったんです．黒沢隆朝は実家が花輪の神官なので，東京の音楽学校に進んでもあまりお金には恵まれていなかったんです．それでお金に困ってしまって，同じ秋田出身の成田為三という人がいるということで，当時九州から帰ってきて赤坂小学校に勤めていた為三のところに，おそるおそる，お金を貸してくれと頼みに行ったそうです．そうしたら，為三は，「君，それは何に使うんだ」ということと，「いつ返すんだ」ということを，すごく厳しく聞くのだそうです．それで，これは駄目かなと内心思ったというんです．そうして為三は，使い道と期限を厳しく聞いた後で，「後ろを向け」と言うわけです．それで隆朝が後ろを向くんです．どうするかと思ったら，為三は火箸を取り出して，それで畳を持ち上げて，その畳の下に札束を隠してあるんです．ちなみに隆朝は横目を使って見ていたそうですが，和気清麻呂（10円）かな，菅原道真（5円）かな，和気清麻呂の方がいいなあ，と思いながら見ていたそうです．こうして4～5回お金を借りたそうですが，そのあと為三に何度会ってもお金を返せとか，一切言われなかったようです．返す期日を厳しく聞くのに，催促はしないんだそうです．それで何度か返さなかったこともあると，黒沢隆朝が語っていました．奥さんには「何やってるの」と怒られていましたけど．

為三という人は，そういう点では物事に対して正確だけれども，それでいて非常に友達にも同級生にも，他人に対しても親切な人であったんだなあ，ということです．自分自身も最初は恵まれていないんですよ．東京音楽学校に入ったときも，新聞配達や牛乳配達をし，芋パンを食べて生活したんです．仕送りなんてないんですよ．そういう世知辛い生活をしていたのに，寛大な，親切なところがあったんです．

これは岡本先生がおっしゃったことなんですがね，為三の家に行くと，二階の部屋がレッスンする部屋で，そこには音楽の原書がずらっと並んでいたんだそうです．下にはピアノが置いてあって，その右脇には「作品棚」というものがあって，為三のその作品棚は，木管の部，金管の部，弦楽器の部，二重奏，三重奏，そしてオーケストラと仕分けがしてあって，そこに作品がぎっしり詰まっていたんです．岡本先生は，為三におそるおそるお願いして，寸法を測らせてもらって同じものを作って真似をしたと言うんです．それが今にして思えば，家に残るたった一つの宝物だと言うんで

すね．

今の話で出てきた為三の作品棚に，木管，金管，弦，二重奏，三重奏，オーケストラという数々の曲が詰まっていたというのは，為三がドイツから帰ってから，いかに器楽曲をたくさん作っていたかということなんですね．というのは，残念なことに，日本の国にはその当時オーケストラというのがないんですよ．いかに日本が遅れていたかということなんですがね．あるのは，上野の音楽学校にオーケストラが一団体だけなんですが，それが，普段に演奏するのではなくて，2年に1回しかオーケストラが鳴らないわけです．これではないのと同じですね．

そういうことですから，為三がいくらオーケストラの曲を作っても，演奏のしようがなかったんです．だから，東京の空襲で周りの家がバリバリと崩れている時に，奥さんがもう爆弾が落ちるから逃げましょうと何度言っても，為三は作品棚にしがみついて離れないんだそうです．奥さんが「どうしても離れない主人を引っ張り出したんですよ」と話していました．あのおとなしい，上品な奥さんが，「あの時は乱暴なことをしました」と，涙を流して話していたんですね．そして，「今にして思えば，主人が竹の棒をけずって，あれは指揮棒のつもりだったんでしょうね．俺の作った曲もそのうちに鳴らすことができるからなと，それを楽しみにして棒を振り回しながら庭を散歩していたんです．そのことを思えば，かわいそうでかわいそうでなりません．今もそのことを思い出すと，夢のようです．でも命が助かったのであきらめてきたんです……」と話していました．奥さんが為三を家から引っ張り出したら，爆弾がバーンと落ちて，ピアノの弦がバリバリとはじける音が聞こえたということです．

ですから，私の言いたいことは，為三は器楽曲の作品があったけど，日本では簡単に演奏できなかったんです．今ならどこの中学校にもブラスバンドがあるでしょう？時代の違いが重すぎたということなんです．

そして，このことは日本中で全然知られていないんです．為三と言えば浜辺の歌だということで，あまりにも一枚看板になってしまっていて，為三にとっては非常に不本意だったでしょう．為三が本格的な作曲家だったことを確認していただきたいんです．為三が50日も船に乗って，知っている人もいないドイツに行ってきた，その心意気，その勉学に対する気持ちを，見習わなければならないと思います．海外に行くのも遊学か留学か分からない今とは大きく違っていたということなんです．ということを，どうか皆さんも，浜辺の歌はもちろん立派な曲ではあるけれど，それだけではないということを，ご理解いただければありがたいと思います．

それで，やっと為三が作曲してから61年目，そして，為三がお亡くなりになってから40年目の昭和60年11月８日，国立音楽大学の大講堂で，為三のたった１曲だけ焼け残った「２つのローマンス」，つまり「青い帆」と「湖底の薔薇」が演奏されました．この曲は，大正13年の６月～８月に作曲されたものですから，弟子上がりするためにロバート＝カーンに提出したものでしょう．そして，「青い帆」というのは，海原を50日間も旅したことにちなむのではないでしょうか．また，「湖底の薔薇」というのは，やはりドイツへ行く途中の海を考えて作曲してオーケストラ曲にしたものだと私は思うんですね．その楽譜は，61年目にしてやっと音が出ました．それをお聴かせします．「青い帆」と「湖底の薔薇」です．

（曲の演奏）

いかがだったでしょうか．

さて，大変お粗末な話ですけども，ご静聴ありがとうございました．為三の器楽曲は，皆さんが初めて聞いていただいたということになります．ありがとうございました．